

<資料>

教職課程における体系的な学修のあり方に関する一考察 —特別支援教育実習の学修から教師として必要な能力の向上を考える—

白石 淳*

抄録：特別支援学校における教育実習の学修成果について、学生に調査を行い、結果を考察したものである。教育実習終了後に、実習を振り返り、実習において学修した内容や成果、実習で大変だったことなどを示した。実習を行う時期や期間等の実習体制は、実習を行う学校により異なるが、実習内容はおおむねどの学校においても共通しており、学生にとって実り多い実習となっていた。しかし、大学卒業後に教師として生徒を指導するために必要と思われる内容であるにもかかわらず、教育実習において十分になされていないとみられる学修内容もあり、教師として必要な能力の向上のために実習や教職課程の内容をより充実させることが必要である。

特別支援学校の教育は、高校と比べて、生徒一人ひとりにあわせた学習指導に重きが置かれ行われている。すなわち、特別支援学校における教育は、教師と生徒一人ひとりとの係わりが学習・生活指導上重視されている。この生徒との係わりを築くことは、短期間である実習を行う学生にとっては容易ではなく、実習中に大変だったことの一つである。これらの実習中に学生が困難を感じた事項を踏まえて、大学における教育実習の準備のための教育内容を見直し、充実することが、教職課程の向上・教師に必要な能力の向上に必要であると考えられる。

キーワード：教育実習、特別支援教育、教職課程、教師の能力

1. はじめに

大学の教職課程において教員免許状を取得するためには、教育実習（高校他）の履修が必要不可欠である。また、特別支援学校教諭の免許状を取得する場合には、加えて「心身に障害のある幼児、児童又は生徒についての教育実習（特別支援教育実習）」¹⁾を修得しなければならない。この教育実習の内容は、「教職課程で履修した学修をもとに、特別支援学校の教育現場における実践にかかわることを通して、教育者として愛情を深め、将来教員となるうえでの能力や適性を考えるとともに課題を自覚する。また、生徒の実態・個別支援の方法（含む生徒の心理他）の把握、教科指導の方法、ホームルームの経営や生徒・進路指導のあり方・方法、学校の運営の方法、教員の職務及び責任等について、観察、参加、実習等を行い、教員として必要な資質能力、態度を身に付ける」であり、学修目標として次の4点が掲げられてい

る²⁾。「1. 生徒の実態と、これを踏まえた学校経営（経営方針）・教育活動の特色（含む組織体制）を理解できる。2. 生徒の価値観形成を育む教科指導・自立活動の具体的な展開方法及びホームルームの運営方法を習得できる。3. 授業、ホームルーム、学校行事等の特別活動、総合的な学習の時間の実践を通して、教師に必要な知識・技能が高まる。4. 教員の職責を理解し、教職に対する自覚が持てる。」である。目標の達成のため実習校において実習が実施され、学生は特別支援教育に関する知識技術を総合的に修得する。その目標を具現化するための実習内容をここに示し、実習がどのような効果をもたらしているのかを実習生である学生の視点により示す。

本稿では、学生から提出された実習報告書³⁾をもとに、特別支援学校の教育実習の学修内容を振り返り、形式・内容的にもほぼ定型化していると思われるがちな教育実習の学修内容や学修効果、困難だった点等を明らかにし、教育実習の質の向上、教職課程の実習に到達するまでの体系的な学修のあり方及び教師に必要な能力を

*北海道医療大学看護福祉学部臨床福祉学科

高めるための方策を検討するために資することとする。

2. 教育実習の位置づけ

特別支援教育実習のシラバスに記載されている学修内容は、4点である⁴⁾。実習期間における1週目は「実習校・生徒の理解、教員の職責について」の学修であるが、具体的には「○学校運営と運営のきまりなどについての理解を深める。○教員の職務内容についての理解を深める。○生徒の学習の様子などについての観察をととして理解する。○教員の授業の方法などについての観察をととして理解する。○教材研究・学習指導案の作成を行い、授業の準備を整える。」である。次の2週目は「教材研究・授業実践、特別活動の指導、総合的な学習の時間の指導、生徒指導について」であり、具体的には「○教材研究・学習指導案の作成を行い、授業の準備を進める。○教科の指導方法の習得、生徒の理解、教員の職責の理解を深める。○特別活動、総合的な学習の時間の観察・参加・実習を行い、その展開方法を習得する。○生徒指導を行い、生徒の理解、その指導方法を習得する。」とされている。このように実習において学修する内容は、授業や特別活動に関する教育の技術・方法のみならず、生徒の理解、教員の職務内容や責務・必要とする能力など、免許状取得後に教員として勤務するために必要なすべての内容である。

3. 学修の内容と効果

学生が取り組んだ教育実習の内容等について示す⁵⁾。

(1) 実習の時期と期間

教育実習の実施時期として、最も多い月は11月で28.6%である。次いで6月の20.4%、10月の16.3%、そして12月、8月、5月、7月、9月の順となる。平成29年度より、高校における教育実習の実施の関係から特別支援学校の実習時期を可能な限り夏休み以降とすることを実習校へ依頼していることも、11月10月の実施が多くなっている理由の一つである。その実習の期間は、単位数上から2週間を標準と定められていることから、実質の実習日数（実習校における事前オリエンテーション等の時間を除く）は67.3%が10日間、次いで16.3%が15日間、14.3%が14日間となっている。

(2) 担任する学年・学級・教科

実習として担任する学級の学年は、最も多いのは特別支援学校高等部における1学年32.7%、次いで2学年と3学年の26.4%である。中学部を担任する者は14.3%で、これらよりも少ない割合であり、取得する高校免許状に対応する高等部が多いことがわかる。

担任する教科は、多い順から生活単元36.7%⁶⁾が最も多く、取得予定免許教科である公民・社会が22.4%、国語16.3%、数学とキャリア学習の6.1%、その他が18.5%である。その他は、自立活動、作業学習、道徳、地理、理科、美術、感覚、コミュニケーションであり、免許教科以外の担任も多くみられる。実際に授業を担当した時間数は10時間が最も多く20.4%、8時間16.3%、4時間14.3%、2時間12.2%などであり、1時間から12時間と幅が広い。また教科以外に担当した領域としては、LHR実習の担当は16.3%、総合的な学習の時間の実習の担当は8.2%であり、実習は教科の授業が中心になっていることがわかる。

次に特別活動の実習状況について示す。部活動を指導した者は、16.3%にとどまる。指導した部活動は多岐にわたり、バトミントン部、陸上部、サッカー部、演劇部、のびのびクラブ他である。部活動指導の有無は学生に任せられる傾向が、また時間的にも指導が難しいという現状もあり、その割合は高くはない。実習中に実施された特別活動の学校行事について示すと、行事は実習時期によるところが大きいですが、69.4%が行事の実習を経験している。球技大会、フィールドワーク、誕生日会、校外学習、生徒総会、ドッチビー大会、校外清掃、肢体連などであり、複数の学生が経験したものとしては、音楽（スクール）コンサート、学校（文化）祭、校外清掃、生徒会選挙、全校集会、携帯安全教室、マラソン記録会、作品発表会、展示（製品）即売会、避難訓練がある。70%近くが体験しており、行事の多さとともに特別支援学校特有な内容もみられる。

(3) 実習の内容と効果

① 実習の成果

学生が教育実習に取り組み、どのような成果を得たかについて、「実習の有意義度」「実習校の指導・内容」「生徒との交流」「教職の理解」「教職への志望」の有無、理解・深まり・高まり度を自己評価から示す（表1）。い

表1 実習の成果

項目			
実習の有意義度	大変有意義 89.9%	有意義 10.2%	あまり 0.0%
実習校の指導・内容	大変良かった 73.5%	良かった 24.5%	少なかった 2.0%
生徒との交流	大変深まった 71.4%	深まった 26.5%	少なかった 2.0%
教職の理解	大変理解できた 59.1%	理解できた 40.8%	充分出来なかった 0.0%
教職への志望	大変高まった 69.4%	高まった 22.4%	あまり高まらなかった 8.2%

ずれの項目とも肯定的に捉えられており、とくに実習の

意義については90%近くが評価している。一方「生徒との交流が少なかった」「教職への志望が高まらなかった」「実習校の指導・内容が少なかった」と意識している学生も少なからずみられた。生徒との交流が深まったなどは、1クラスの担任生徒数が少ないことに起因するなど、特別支援教育特有の教育環境に由来することも考えられる。

教育実習における学修の成果は、次に示すように多様である。自由記述に記載された内容を、【授業のこと・教える技術】【授業のために必要なこと（授業の準備）】【生徒との接し方（支援の方法）】【生徒のこと】【教師の仕事】【特別支援教育・障害のこと】の6つのカテゴリーに分類して示すことにする。

【授業のこと・教える技術】

- 良い授業とは何か。
- その子にあったことを一つひとつ試しながらやっていくことで、一人ひとりの生徒と向き合えることを学んだ。
- 生徒一人ひとりの接し方、指導の方法の工夫を考えるようになった。
- 個々の学力にあわせた授業を行うことが、どれほど大変であるということ。
- 授業の進め方。
- チームティーチング。
- T Tの重要性を理解できた。
- チームで授業をする難しさ。
- なかなか分かっているところと、分からないところを見つけるのが難しい。
- ポイントを絞って授業を行う重要性。
- 生徒の意欲を引き出す声掛けの難しさ（特支は高校よりも難しい）。
- どのようにしたら障害のある生徒にわかりやすいか悩みながら取り組んだ。
- 少人数で学習する楽しさを知った。
- 個々にあった教材研究の大切さ。生徒に集中して授業をうけさせるのはどうしたらよいか。時間を上手に区切る方法を学んだ。

【授業のこと・教える技術】については、高校（普通学校）の実習においてもみられる内容もあるが、特別支援学校の実習においては「一人ひとり（個々）に対する指導」「チームティーチング、チームで行う授業」「障害のある生徒に対する授業」などが特有な内容としてあげられている。

【授業のために必要なこと（授業の準備）】

- 教材研究の大切さ、教材を工夫することによって生徒の理解を深めることができること。
- 教材研究の大切さ。障害にあわせてどの授業の方法が良いのか考えることの大切さ。
- 一人ひとりにあった教材研究が必要なこと。

- 生徒一人ひとりのことを良く知ったうえでの学習指導案作り。
- 生徒の実態を反映させた学習指導案、授業の作り方。
- 個々にあった教材研究の大切さ、生徒に集中して授業を受けさせるためにはどうしたら良いのか。
- 指導案の作り方。授業の進め方。生徒の気持ちになって行うこと。
- 生徒にあわせた指導案の書き方、教材研究。
- 指導案の書き方（2件）。
- 視覚的な教材を作るのがいかに難しいということ。

【授業のために必要なこと（授業の準備）】については、学習指導案の作成など高校の教育実習においても同様な事項はみられるが、加えて「障害にあわせて」「一人ひとりにあった」「個々にあった」など、生徒一人ひとりの障害・発達や学習の状況を理解したうえでの学習指導案の作成、教材研究や授業が必要であることを、また、視聴覚教材の作成など障害にあわせた教材の作成が必要であることを学修している。高校においても一人ひとりの生徒を考え授業を展開するが、特別支援学校特有の教育方法・指導方法を含む内容であることがわかる。

【生徒との接し方（支援の方法）】

- 待つという大切を学んだ。
- 障害ではなく生徒を見ること。
- 生徒への係わり。
- 一人ひとりの配慮のこと。
- 生徒とコミュニケーションをとる大切さ。
- あきらめず生徒と接すること。
- 相手の立場にたって行動することの大切さ。
- 生徒の良い点を積極的に褒めること。
- 生徒との距離感（2件）。
- 生徒の持っている能力を最大限に発揮させるためには、支援をし過ぎないということがあるということを知った。

【生徒との接し方（支援の方法）】においては、コミュニケーションの重要さなども学んでいるが、「待つという大切さ」「生徒へのアプローチ」「相手の立場にたっての行動」など高校の実習にもみられる内容もあるが、「支援をし過ぎないということがあるということを知った」「距離の取り方」「支援のあり方」など特別なニーズ、生徒一人ひとりに合わせた支援という考え方やあり方について、悩みながら学んでいることがわかる。

【生徒のこと】

- いろいろな角度の視点から生徒の実態を知ることができた。
- 生徒の家庭背景を知ることも大切ということ。
- 生徒の気持ちを学ぶことができた。

【生徒のこと】については、高校の実習と同様の内容がみられる。生徒の今日的な実態、生徒の気持ちなどが

あげられており、基本的な事項については、特別支援学校特有な問題ではなく、高校の実習で学修等の基礎的な学修内容であると考えられる。

【教師の仕事】

- 教員として働く意義や楽しみ。
- 先生のやりがい。

【教師の仕事】については、高校の実習と同様の内容がみられるが、教師に対する見方や職務についても学んでいることがわかる。多くの者が高校の実習を経験しているゆえか、その数が少なくなっていることから、前記「生徒のこと」と同様に基礎的な学修内容と学生は捉えているのではなかろうか。

【特別支援・障害のこと】

- 特別支援教育がどのようなところか細かなところまで学べた。
- 自立活動の必要性。
- 支援の方法。
- 障害の原因ともなる病気の知識。
- 障害のことを学んだ。
- 体力づくり、作業学習の意義を学んだ（言葉では理解していたが、実際に体験してその必要性を理解した）。

【特別支援教育・障害のこと】については、特別支援学校の実習の特有な内容であり、特別支援教育や障害のことについて多くあげられている。「特別支援教育の内容・あり方・意味」「障害・その原因となる病気」を中心に、専門的・多岐に学んでいることがわかる。

(4) 実習中における喜び

では、次に特別支援教育実習における喜びについて示す。教育実習において、どのようなとき・ことに学生は喜びを得ているのであろうか。このことから、達成や充実の機会等を考えることにする。

- 生徒がいろいろなことを話してくれたこと。
- 生徒との係り（3件）。
- 生徒との距離が縮まったとき。
- 生徒が少しずつ心を開いてくれたこと。
- 実習を重ねていくうちに生徒と積極的に係ることができたこと。
- 生徒と交流を深められた。
- 他学年、他学科の生徒も名前を憶えてくれた。
- 授業を楽しんでもらえたこと。
- 生徒が興味ある授業を展開できたとき。
- 生徒が（授業を）わかったとき（2件）。

教育実習における生徒との人間的な係わりや繋がりのなかで、喜びが生じていることが多くみられる。学校生

活場面、授業場面での係わりにおいてである。授業・展開の場面においては、授業における生徒の反応等の生徒の取り組み状況など学習面や生徒の成長に関することである。すなわち、生徒との係わりや授業展開の成功が、実習生の喜びや達成感を得ることに繋がっている。これらは、学生の自己の目標の達成、自己の努力に対する満足度に起因すると考えるが、生徒と学生との相互関係のなかで形成されることであろう。もちろん、高校においても同様ではあるが、高校の場合には、生徒との係わりよりも、生徒の授業の理解などその内容に関してより多くみられるのが特徴的である。特別支援学校の場合には、それよりも学校生活の場すべてに直接生徒と学生との係わりが多岐多様に生じるので、また担任する生徒数も少ないこともあり、生徒との係わりが強く学生へ影響を与えているものとする。

(5) 実習中に困難と感じたこと

実習中に学生が困難と感じたことは、どのようなことであつたのであろうか。このことについて次に示す。

- 生徒一人ひとりの特性を把握しきれていないうちに、指導案を書かないとならないこと。
- 学習指導案の作成（2件）。
- 授業の方法。
- それぞれの生徒にあわせた授業のやり方、展開をすること。
- 教材研究（3件）
- 生徒の生活とリンクした授業内容を選び展開していくこと。
- 作業学習の指導が困った。
- 「達成感」と言っても個人の感じ方が異なるので、表現としては簡単だけれど、意味合いが難しい。
- 連続しての授業。
- 実習生としてどこまで生徒と係ってよいのか。
- 障害のある生徒にどこまで配慮や手助けをすればよいのかわからなかった。
- 生徒の係わり方（2件）。
- 生徒への声掛け。タイミングなど。
- 生徒との距離がつかめなかった。
- 傾聴の姿勢が難しい。
- 生徒からの質問。障害の関することを聞かれ困った。
- 障害の理解（2件）。
- 子供の障害や生活状況を分かるのであれば把握し、あるていど知っておくことが難しい。

実習中に感じた困難なことについて示すと、困難（困った）とした件数が多かったのが、授業に関連することである。学習指導案の作成、教材研究などがあげられているが、ここにおいても生徒一人ひとりに適した対応に難しさを感じている。また、作業学習の内容・指導、空き時間が無く連続した授業の担当など、特別支援学校ならではの難しさがあげられている。障害を有する生徒に対する教育であるゆえに、「個人の感じ方が異なるの

で、表現としては簡単だけれど、意味合いが難しい」と悩みつつの学習指導案の作成・授業展開を行っている。生徒との対応においては、「どこまで生徒と係ってよいのか」「どこまで配慮や手助けをすればよいのか」など短期間の実習だからこそその悩みや困難を抱えていることもみられる。これらのことは、生徒との係わりにおいても同様である。それぞれの特性を有する生徒だからこそ、その基盤として必要な障害の理解も重要になるが、短期間の実習、その準備期間においてこれらのことを得ることは、実際には困難なことであると思われる。

(6) 実習への取り組み状況

学生の教育実習への取り組み状況についての自己評価を、次に示す(表2)。取り組みの状況については、実習の評価観点の項目でしばしば用いられる項目を用いて、自己評価を行ったものである。いずれの項目とも「とても・おおむね取り組んでいる」との評価であり、なか

表2 実習への取り組み状況

	とても取り組んだ	おおむね取り組んだ	取り組んだ	もう少し取り組めばよかった	取り組めばよかった
学習指導における教材研究	53.3%	35.67%	4.4%	6.7%	0.0%
学習指導における指導方法	53.3%	35.6%	4.4%	6.8%	0.0%
生徒指導における生徒理解	51.1%	40.0%	8.9%	0.0%	0.0%
生徒指導における学級指導	40.0%	36.7%	22.2%	2.2%	0.0%
実習態度における勤務態度	55.6%	28.9%	15.6%	0.0%	0.0%
実習態度における事務能力	48.9%	35.6%	13.3%	0.0%	2.2%

でも授業に関する教材研究・指導法は「とても」の回答を含め高い割合で取り組んでいることがわかる。

一方で、生徒指導や事務能力に関しては、その機会や内容などが明確にされていないことからか、高いとはいえない面もみられた。

4. 教育実習から教職課程の質の向上へ

特別支援学校教諭の免許状は、基礎となる普通学校の免許状の所有(見込み)が前提とされ、取得できる免許状である。したがって、高校(普通学校)における教育実習を多くの学生が経験しているなど、学校現場における学修をすでに済ましていることがある。加えて特別支

援教育に関する科目の「心身に障害のある幼児、児童又は生徒」に係る「心理、生理及び病理」「教育課程及び指導法」(法令上の科目名)について学修を行っている。それゆえ、教育実習は特別支援教育の内容に特化した実習が進められている。前述したように、教育実習の成果、困難においても、特別支援教育や障害児に関する特有な内容がみられていることから、このことが示される。これらのことを踏まえて、高校の実習と比較しながら考察を深める。

特別支援教育実習の時期は後期が多く、6月を中心とする高校の教育実習修了後に行われることが多い。実習期間、担任する学級は高校と同様であるが、担任する教科は取得する免許教科にはとられず多様である。また特別活動の部活動の担当は高校の実習よりも17.3%低いが、実習中に経験する行事は20%高く、それぞれ学校における取り組みの度合いが異なり、それが実習に反映されている。教育実習の成果としては、普通学校に比べて「実習の意義」「生徒との交流」「教職の意義」「教職への志望」の項目で、肯定的な割合が高い。特別支援教育という学校・学級や指導の特殊性や普通学校の教育実習の終了後の実習であることが、これらの背景にあると考える。具体的な実習の学修の内容としては、高校の実習では「教える技術、教えるために必要なこと」「教師に対する見方、教師の職務」「コミュニケーション力」などであるが、特別支援教育実習においては、「一人ひとりにあわせた学習指導、生徒指導」「生徒との接し方・支援方法」がみられるなど、高校実習に加えての内容となっている。これらのことは、実習中における困難と感じた点においても同様である。喜び・達成感を得たことについても、生徒との係わりに関することの方が多くなっているなど特徴的である。

教育実習への取り組み状況としては、高校実習に比べて「生徒指導における生徒理解」が「とても」「おおむね」を含めても特別支援教育実習の方が高い。「学習指導における教材研究」「学習指導における指導方法」においては、特別支援教育実習の方が「もう少し取り組めばよかった」で高い。このことから、特別支援教育実習においては生徒一人ひとりに対する個別指導が中心となるゆえに、学習指導の難しさが現れていると考える。

これらのことを教職課程のそれぞれの授業において、留意し活用することにより、教育実習までの一貫した教職課程、教育実習をより体系的に学修することが、また教師に必要な能力の向上に資することができるのではなかろうか。具体的には、高校の実習やその準備過程の学修内容との重複を避け、それぞれの学校特有の課題・学修内容の特徴を活かした指導などである。また特別支援学校の免許課程においても教育実習の内容を見通したう

えで、教職課程全体の学修内容を検討、効果的な学修プログラムを再構築することも可能ではないかと考える。

5. おわりに

特別支援教育実習は時期や期間などの実習体制は、実習校により異なるもののその内容は、学生の学修にとって実り多いものとなっている。特別支援教育実習は、高校の教育実習に加わる実習であるので、内容、学修効果ともに特有用なものであることが示された。言い換えると、特別支援教育実習の意義が、存在していることの証でもある。本稿では学生の学ぶべき内容、不足している学びの内容を明らかにすることができた。これらの教育実習の学修を、特別支援教育の免許課程全体の学修の改善に活かすことができるように、実習の困難な点、実習の効果等を初年時から修了までのカリキュラムマップ上の各授業科目に活かし、学修すべき内容をより体系的に配置、充実するための改善などに資することができるのではないかと考える。また、教職課程における特別支援学校の教職を目指すモデルとしての教師像・必要とする能力や教職課程の到達目標の設定、教育課程の改善策の検討などにおいても有益に活用することができるものと考えられる。すなわち教育実習の内容・効果をもとに、教育実習を見通した教職課程とするための効果的な学修プログラム、教職課程全体の評価・見直しにも貢献できるものと考えられる。

注・引用文献

- 1) 3単位以上が必要となる。「教職課程履修ガイド 教員免許状取得の手引き 2021年度入学生用 北海道医療大学看護福祉学部臨床福祉学科」
- 2) 令和3年度「授業計画」北海道医療大学看護福祉学部
- 3) 平成23年度から令和2年度に提出があった49件を対象とした。

- 4) 令和3年度「授業計画」「前掲書」
- 5) 高校との比較は、次の論文により比較を行った。白石淳(2018)「教育実習が学生にもたらす学修効果と教職課程 ～実習の内容と学修効果から教職課程入門、教職課程とその指導を考える～」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第25号、83-91.
- 6) 全実習生の内の割合である。複数担任した学生がいる。

参考文献

- 北海道私立大学・短期大学教職課程研究連絡協議会編 (2010)「教育実習の手引(第6版)」学術図書出版.
- 堀田千絵、西川潔、馬野範雄、宮野安治(2019)「教育実習で培うべき力とは 特別支援学校の現職教員を対象とした全国調査からの考察」『人間環境学研究』17巻1号、pp.65-72.
- 池田浩明、小川透、武石詔(2011)「特別支援学校の教育実習における 学生の意識について(1)―実習生の期待・不安・成長に関するアンケート調査から―」『藤女子大学紀要』第48号第Ⅱ部、pp.125-131.
- 池田浩明、小川透、武石詔吾(2012)「特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究(1)―教育実習担当指導教員へのアンケート調査から―」『藤女子大学紀要』第49号第Ⅱ部、pp.85-89.
- 今野邦彦、原田公人、矢野潤(2019)「特別支援学校の教育実習における学生の意識について(4)―実習生の意識の変化について―」『藤女子大学人間生活学部紀要』第56号、pp.1-15.
- 白石淳(2012)「教育実習における学習効果とその課題―学生に対するアンケートをもとにした一考察―」『北海道学校教育学会研究紀要』第24号、pp.1-10
- 白石淳(2019)「教育実習における学習指導案と教育方法～学生が作成した研究授業の指導案の分析をとおして」『看護福祉学部紀要』(北海道医療大学)第26号、pp.65-74.

Survey on systematic learning in the teaching profession and improvement of abilities required for teachers

Jun SHIRAISHI*

Abstract:

This paper reports the results of the questionnaire for students regarding their achievements in the teaching practice program at special-needs schools. In the questionnaire survey, the students were asked about what they learned and achieved, the difficulties they may have faced in the course of the teaching practice and the like.

The framework for teaching practices including the season, period, etc. differed from school to school. However, the contents of teaching practices were generally the same in every school and the students gained productive and valuable teaching experience. However, whereas they were supposed to learn what is required to become a teacher after graduating the university, the current teaching-practice program may be insufficient in some aspects. Therefore, it is necessary further to improve the program to allow every student an opportunity to improve their own required capabilities as full-fledged teachers.

The teaching-practice program conducted at special-needs schools is focused on the educational guidance specifically tuned for the needs of each individual student, comparing to the program conducted at ordinary high schools. That is, for education at special-needs schools, the rapport built between teachers and students is considered important for the sake of educational guidance and daily life guidance. Building such rapport with students resulted not to be easy for those students and to be one of the difficulties they faced in the course of the teaching-practice program. In light of such difficulties they faced, it is required to enhance and strengthen the quality of education at universities in preparation for teaching practice.

Key Words : Practice teaching, Special needs education, Teacher training course, Teacher qualification ability

* Department of Social Work, School of Nursing and Social Services, Health Sciences University of Hokkaido